

## 在来イワナの産卵状況調査

片岡 佳孝

### ◆背景・目的

在来個体群は、学術的に貴重なだけでなく、実際の漁業権漁場における漁獲対象種として、また、在来種苗作出のための資源としても価値がある。在来個体群を維持管理していくには、個体群の保全が前提となる。そのためには、在来個体群がおかれている状況や現在の生息環境について把握しておくことが重要である。そこで、在来個体群の生息が確認されている犬上川の1支流において、産卵状況調査を行った。

### ◆成果の内容・特徴

- ・調査は、犬上川の1支流で行った。調査区間の全長は760m流れ幅1~2m、ステップ-プールで構成された源流域である。
- ・2007年の10月24日、11月8日、11月17日および11月27日に産卵行動と産卵床の有無を調べた。また、自記記録式水温計で産卵期間中の河川水温を測定した。
- ・産卵床の造成は、11月8日~11月27日までの調査で認められ計35個が確認された。形成場所は、落ち込み下(横)2個、淵中央1個、淵尻19個、瀬脇13個で淵尻がもっとも多かった。
- ・この支流でのイワナの産卵は、河川水温が10℃~12℃となる頃から始まり、営巣ペア数と造成された産卵床数から、11月7日の調査から11月17日の調査にかけてが産卵のピークであったと考えられた(図1)。

### ◆成果の活用・留意点

- ・産卵時期と河川水温の関係は、在来イワナ卵の飼育管理を考える上での基礎資料とする。

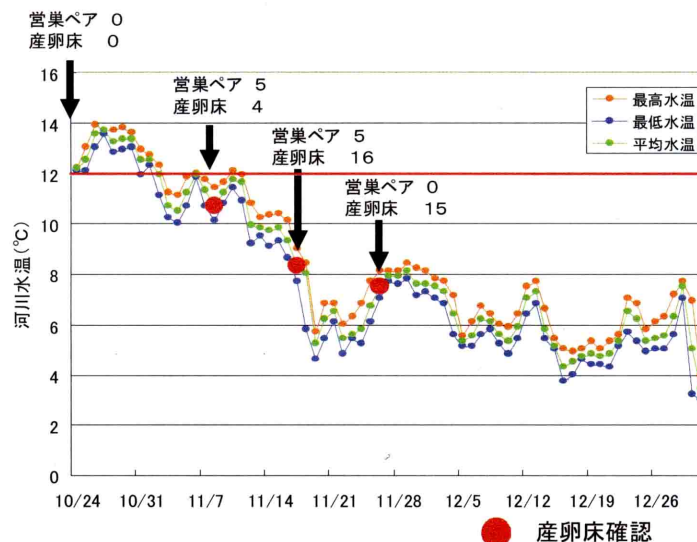


図1. イワナの産卵と河川水温